

革命思想と実存哲学

武藤光朗著

経済哲学
Ⅲ



創文社

武藤光朗(むとう・みつろう)

大正3年生まれ。東京商科大学(現・一橋大学)卒業。
現在、社会思想家、自由人権委員長、早稻田大学文学
部客員教授。主著・経済哲学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(『経済学史の哲
学』、『経済倫理の実存的限界』、『革命思想と実存哲学』)、
『限界状況としての日本』、『自由人権の運命』他。訳書・
ヤスバース『哲学的世界定位—哲学Ⅰ』(創文社)他。

〔革命思想と実存哲学〕

昭和四十八年六月二十日 第一刷発行
昭和五十五年三月二十日 第四刷発行

定価 一、五〇〇円

著 者 武 藤 光 朗

発 行 者 久 保 井 理 津 男



印 刷 者 中 内 康 児

東京都千代田区一ツ木二四一八

発 行 所

東京都千代田区
一番町一七番地

株式
会社

創 文 社

電 話 (283) 七二〇一(代表)
振 替 東京二一九二四七二
郵 便 番 号 一〇〇二

(落丁・乱丁の節はお取替いたします)

目次

第一章	高度工業社会の中からの哲学的思索	三
1	現代の無常感と「貨幣愛」	三
2	職場の時間——「肉体の中の死の空虚」——	五
第二章	マルクスにおける経済哲学的思索の展開	三
1	「人間の自己疎外」への経済学的接近——「意識一般」の立場——	三
2	史的唯物論——「精神」の立場——	六
3	史的唯物論の実存的限界	三
第三章	この時、ここにおける、この私	三
1	世界史と単独者	三
2	「限界状況」	三
3	理性の無限の否定性	三
4	自己存在者の結合と例外者	三

第四章 同胞性・恐怖の弁証法——サルトル的自由の運命…………… 望

1 「自由の刑」——自由・責任・孤独・絶望…………… 望

2 戦争とレジスタンス…………… 兎

3 メドゥーサのまなざし…………… 兎

4 カミュ・サルトル論争…………… 望

5 「物質の全体性」と「階級的存在」…………… 望

6 集団の弁証法…………… 望

7 粛清の論理…………… 兎

第五章 徒党の慰め——全体主義の恐怖…………… 望

1 「衆は虚偽なり」——キルケゴール…………… 望

2 フランス革命における同情・恐怖の弁証法…………… 望

3 「滅私」の論理と倫理…………… 望

第六章 実存的交わりと政治的自由…………… 望

1 崩壊の体験——ヤスパースと全体主義恐怖政治…………… 望

2 自由の反抗…………… 望

3 実存的交わりのための政治的要請…………… 兎

4	政治的自由の擁護	九
---	----------	---

第七章	人権としてのペルソナ	一〇三
-----	------------	-----

1	超政治的エートスの三つの根拠	一〇三
---	----------------	-----

2	プラトーンの「哲人政治家」	一〇四
---	---------------	-----

3	ドストイェフスキーの「大審問官」	一〇五
---	------------------	-----

4	スターリニスト独裁の場合	一〇七
---	--------------	-----

5	「実存主義者」オレストとデモクラシー	一〇九
---	--------------------	-----

6	自由の空間	一一一
---	-------	-----

7	法的人格	一一六
---	------	-----

第八章	孤独への権利	一二〇
-----	--------	-----

1	死の影のもとでの孤独	一二〇
---	------------	-----

2	権力の前の孤独——「精神のピアフラ」——	一二一
---	----------------------	-----

3	社会主義協同体と「孤独への権利」	一二三
---	------------------	-----

4	孤独からの逃走	一二五
---	---------	-----

5	孤独の中からの協同体	一二六
---	------------	-----

6	醒める可能性	一二〇
---	--------	-----

第九章 日常性への回帰——マックス・ウェーバーからの呼びかけ——……………三〇

1 無基底性……………三〇

2 事象性の世界……………三〇

3 隷従の殻——官僚制の宿命……………三一

4 「日常性」への回帰……………三一

第十章 自由の社会主義……………二九

1 肉体の反抗……………二九

2 改革への姿勢……………二九

3 計画化とその限界……………二九

4 中庸としての反抗……………二九

5 二重の反抗としての「民主社会主義」——「フランクフルト宣言」——……………三〇

6 反抗の条件としての政治的自由……………三〇

7 資本主義への反抗……………三〇

8 福祉国家的状況……………三〇

第十一章 現代からの社会主義への挑戦……………二九

1 「反体制文化」——社会主義的連帯への挑戦……………二九

2	都市の病理——社会主義的計画化への挑戦……………	一八
3	性と神——社会主義的参加への挑戦……………	一六

第十二章 限界状況としての現代…………… 一五

1	暴力の海……………	一五
2	終末の象徴——原爆・全体主義・環境破壊……………	一六
3	「科学的・技術的時代」の限界……………	二〇
4	現代の選択……………	二五
5	歴史の暗号……………	二〇
6	挫折を通じての超越……………	二四
7	同時代人的共感……………	二九

補論 極限概念と限界状況…………… 三七

1	左右田哲学への回想……………	三七
2	無限彷徨の論理……………	三二
3	「極限概念」への飛躍……………	三四
4	「限界状況」としての „Meinheit” „Deinheit” u. s. w.……………	三六

付録	読書の思い出……………	三四
----	-------------	----

後記	1
索引	9

革命思想と実存哲学―経済哲学Ⅲ―

第一章 高度工業社会の中からの哲学的思索

1 現代の無常感と「貨幣愛」

哲学するということは人々が自分の生きてゆくぎりぎりの拠りどころを求めて思索するということである。

自分がいま自殺しようとしているのではない限り、私たちは自分の人生を意識のどこかで肯定して生きているのであるが、しかし人生は無常である。私たちは時の流れの中を流されている。その流れが何処から来て何処へ行くかを私たちは知らない。私たちの人生は、自分がこの世に生まれる前の暗黒から、自分がもう存在しなくなる死後の暗黒へと、刻々にすべり落ちてゆく。そのすべり落ちてゆく過程では、何ものも静止したままではいることはできない。すべては過ぎ去り、減びて行く。

この人生の無常を思うとき、私たちは不安に襲われる。暗黒から暗黒へとすべり落ちながら、私たちは、今も自分がこれを制止しなければ、何ものかが永遠に失われてしまうのではないかという不安に怯え、自分を支えてくれるもの、無常必滅の自分の人生を無常必滅だけではないものにするような何ものかを求める。

それを求めて思索するとき、私たちはすでに哲学することを始めているのである。⁽¹⁾

まず私たちは日常生活の中でさまざまな事物に遭遇し、その中に巻きこまれて生きている。私たちはそこでは

さまざまな欲望に駆り立てられ、その満足を求めて浮動する。日常生活の中で私たちはまず、現存在 *Realität* ⁽²⁾として生きているのである。

現代の高度工業社会では、現存在としての私たちの欲望の満足はほとんどすべて貨幣を媒介としておこなわれる。現存在として生きてゆくためには私たちはまず貨幣を手に入れなければならない。だからJ・M・ケインズも「われわれの人生における貨幣的動機 (Money motive) の意義」について、こう語ったのであろう。——「生活活動の九割までが習慣的に貨幣への愛 (love of money) に訴えるものであり、個人の経済的安定を求めて苦勞することが人生の努力の第一目的であり、貨幣が建設的成功の尺度として社会的に評価されており、家族や将来のための必要な準備の基礎として貨幣を保蔵しようとする本能が社会的に喚起されている現状では、いずれにせよ現代の道德問題は貨幣への愛にかかわるものだということが、私には日々明らかになってくるように思われる。」⁽³⁾

たしかに私たちは貨幣について思い煩いながら日々を送っている。現代の高度工業社会では私たちの苦惱も責任も争いも、そして生死の問題でさえも、ほとんどすべて貨幣の媒介作用を通じて私たちに迫ってくるからである。

だが貨幣は現代社会を隔々まで動きまわっている小悪魔である。それは私たちの生活のいたるところに入りこみ、あらゆる人間関係に介入し、すべての人間を、天才も凡人も、聖者も俗人も、すべてこれを通約し、数量化し、即物化してしまう。貨幣はニヒルな平等主義者であって、国王の手にある場合でも街頭の浮浪者の懐にある場合でも、態度を変えない。それは人生において計算の対象としてはならないもの、人各々の内面性の奥底に秘められたものまでも計算的悟性の光の中に引きずりだし、これを貨幣価値の一定量に換算しようとする。

だから私たちは、現存在としての欲望を満足させようとして貨幣を求め、その媒介作用に身をゆだねるのであ

るが、そうすることによって、自分の内面性の奥底に秘めた何ものかを疎外している。あるいは、詩人の逆説的表現に倣ってこう言ってもいいだろう。⁽⁴⁾——

「われわれの非合理的な思惟はこう計算する——価格あるものはすべて隠匿される、だから隠匿されるものは高価だ、と。」

——ポール・ヴァレリイ「裝飾」より。——

その疎外されるものは何か。貨幣価値の媒介作用によって全体化される経済社会の悟性的計算の対象界で、私たちが自分の内面性のうちに隠匿しようとする「高価なもの」とは何か。

それを問うことによって私たちはすでに経済哲学的思索の道を歩みはじめているのである。

2 職場の時間——「肉体の中の死の空虚」——

現代の高度工業社会で貨幣を手に入れるためには、各人はさまざまな大衆機構とかかわりをもち、その中で大衆に役立つ機能を果たすことによって、そこから「所得」を引きだしてこなければならぬ。

ということとは、自分の家に特別の資産でもあって遊んで暮らせる人たち以外は、だれでも働いて生きてゆかなければならないということである。働くには、農家や自家営業の人たちのように、自分の家の仕事をする場合もあれば、会社や銀行や官庁のオフィス、工場、鉱山など、自分の家の外の職場に勤める場合もある。その職場で、多くの人々は一日のうち八時間ぐらい、通勤の時間を加えれば十時間またはそれ以上を、過ごしている。かりに一日八時間としても、夜眠っている時間を除けば、一日の目をさましている時間の約半分は職場で送られている

ことになる。この職場の時間を人々はどうか感じながら過ごしているのだろうか。

試みに、どこかの工場で、従業員たちが毎週水曜日の昼休みの時間に何を考えているかをたずねてみるがよい。こういう答えが多くの労働者たちから返ってくることだろう。――

きょうは仕事を始めてからまだ三時間しか過ぎていない。まだあと五時間働かなければならない。時間が早く過ぎてくれればいいのだが……。

それから次に、きょうは水曜だから、今週はまだ月、火曜と二日しか過ぎていない。週末まではまだ木、金曜と二日ある。早く日がたつてくれればいい……という感想がつづくだろう。⁽⁵⁾

こうした心理は現代の高度工業社会の労働者の人生にどんな陰影をあたえているだろうか。

彼らは毎日の目をさましている時間の約半分を職場で送り、しかもその職場の時間ができるだけ早く過ぎ去ってくれることを望んで生きている。そして早い人は十五、六歳から、遅い人でも二十四、五歳から、年老いて働けなくなるまで、こうした毎日が続く。だから、彼らは自分の人生の花ざかりの約半分以上を、できるだけ早く過ぎ去ってくれることを望みながら生きていることになる。

私たちの人生は時の流れの中を流されている。その流れの行きつく終末は死である。刻々に生きてゆくということは刻々に死に近づいてゆくことである。現代の労働者たちが職場の時間を早く過ぎ去ってもらいたいと思つて生きていることは、それだけ死を急いでいること、つまり自分の目ざめた人生の半分以上を自殺者の心理で過ごしていることを意味するのではないか。

これについてはシモーヌ・ウェーユが傷ましい証言を残してくれている。――

「現在労働者が遂行しつつある努力は、退勤の時間以外には何の目標も持っていない。しかし労働の一日はい

つでも他の一日に続くので、問題になっている完成は死以外の何ものでもない。⁽⁶⁾」

「肉体労働——時間が身体のなかにはいつてくる。キリストが聖体の秘跡によつても、⁽⁷⁾となられたように、人間は労働によつても、⁽⁷⁾になる。いわば、労働は死のようなものだ。」

パリの高等師範学校を卒業して女子高等中学校の哲学教師をしていたシモーヌ・ウェーユは、「虐げられた労働者の不幸を身をもって体験する」ため、一九三四年十二月、教師を辞めて女工となった。才能と教養に恵まれた感受性の鋭い二十五歳の女性哲学教師が、一九三〇年代の破局を迎えつつあった西欧の大衆社会を背景として工場労働に身を投じ、その無残な「体験」を生活の記録として私たちに残してくれたのである。

その記録の中にはこういう一節がある。——

「工場に要求される疲れのひどい消極さに屈服するためには、それ自体の中に動因を求めなければならない。鞭か鎖があれば変貌はもっと容易に行なわれるであらうけれども、鞭も鎖もそこないから、労働の条件そのものによつて、叱責と解雇への恐怖、金銭を貯えようというがつつした欲望、そしてある程度には速度記録への趣味以外の動因が入って来ることが妨げられる。……これらの動因が魂を占領していると同時に、思考は苦悩を避けるためにある一つの時点にしがみつき、意識は労働の必要性が許す限り消滅している。……このように過ごされた一日の後で、労働者は一つの苦情しか持っていない。……時間は彼にとつて長く、彼は追放の中に生きた。落ちついた気持ちの無かった場所では一日を過ごした。機械と加工すべき品物はそこに安住している。そして労働者は品物を機械に近づけるために認められているだけだ。⁽⁸⁾」

オートメ化が進んだ今日の工場労働の人間の意味は、このシモーヌ・ウェーユの「体験」と本来的にどれだけ違っているだろうか。

一九五〇年代になって、「近代産業の非人間的な圧力」を分析した社会学者のダニエル・ベルは、シカゴの或る労働者の次の言葉を伝えている。⁽⁹⁾——

「全工程が非常に自動化されたために、仕事のかたわら多くの深刻な瞑想にふけることができると思う人もあるかもしれない。しかし圧搾機の下に鋼鉄を入れるには、慎重でなければならない。だから仕事中は『白日夢』をみることにすら危険である。われわれの班には指を失った仲間が六人もいる。」

一九六〇年代の高度経済成長をとげた日本の先端的な工場の内部では、この「長すぎる職場の時間の重み」には孤独な不安の影さえ加わっているようだ。

たとえば、年間五万トンの酸化エチレンを生産している日曹油化工場の運転員は、現場パトロール五人、計器ボード二人、主任一人の計八人の職場構成だが、そのパトロールを担当している人間の「いつわらざる感想」を、中岡哲郎は『人間と労働の未来』の中で、こう紹介している。⁽¹⁰⁾——

「怖いんです。一人で現場に放り出されるのが……。もし緊急事態が生じたら、一体私になにができるというのですか？ 私は脚がすくんでしまいます。」

労働省の調査によれば、日本経済の高度成長の過程で大量生産方式が多くの企業に取り入れられた結果、いろいろの新しいタイプの労働災害が出現した。これらの労働災害は、大別して、(1) ベルトコンベヤーや電算機のある職場に多い単純なくり返し作業、(2) オートメーションの計器類を管理する職場での長時間監視労働、の二つから起こる。単純なくり返し作業は、ベルトによる流れ作業方式をとっている組立て、包装、検査工程などに多く、ラジオやテレビの組立て工、時計や温度計、自動車などの製造業の各部門にわたっている。また、電算機のキーパンチャーやテレビピストもこの分野にはいり、とくにキーパンチャーは単調労働からくる欲求不満が